ぽこんと盛り上がった丘にあった集落

19 タプコプ遺跡

所在地：苫小牧市字植苗 176

写真の解説
1 昭和 58（1983）年の発掘調査の様子。丘の左側に見えるのは、国道 36 号線と美々川。　2 クマ意匠付き土器。続縄文時代前半の集団墓地の一つから発見。クマのデザインは一種のステータス・シンボルだったのではないかと考えられている。

タプコプ遺跡は国道 36 号の植苗橋交差点の西にある丘にあります。昭和 38 ～ 40（1963 ～ 1965）年の教育委員会による調査や苫小牧工業高校郷土研究部による調査が行われています。このときの調査では縄文時代からアイヌ文化期までの資料が見つかっています。

本格的な発掘調査は昭和 58（1983）年に国道の工事に伴い行われました。縄文時代の集落や続縄文時代の集団墓地、擦文時代の住居など各時代の資料が見つかっています。具体的には縄文時代のものと思われる 17 か所の住居、6 つの墓や中期の土器（タプコプ式土器）などが発見されました。そのほか、北海道最古と考えられる鉄製品や動物（クマ）のデザインが見られる土器、漆塗りの弓や、海外（大陸）から持ち込まれたと思われるガラス玉も発見されています。

鳥類 260 種以上の渡り鳥の中継地

20 ウトナイ湖

所在地：苫小牧市字植苗

写真の解説
1 空撮したウトナイ湖（写真提供：㈱志方写真工芸社）　2 ウトナイ湖から鳥たちがが羽ばたく様子（写真提供：苫小牧写真連盟）

※1 砂洲（さす）
海岸線をやや離れて、海側に細長く砂れきが堆積してできた地形

ウトナイ湖は、苫小牧の東部郊外に広がる周囲 9 ㎞、面積 275 ヘクタールの淡水湖です。かつては海の入江でしたが、3,000 年ほど前から始まった海退により陸化し、河口に砂州[※1]や砂丘が発達したことで海と切り離され淡水湖になりました。一帯は勇払原野と呼ばれる広大な湿地帯でしたが、むかしの面影を残すのは、このウトナイ湖と周辺の湿地、北側から流れ込む美々川の流域だけになりました。

ウトナイ湖は日本有数の渡り鳥の越冬地、中継地で、毎年マガン、ヒシクイ、オオハクチョウ、コハクチョウなど数万羽が飛来します。また、湖周辺の樹木帯はオジロワシ、オオワシの越冬地にもなっています。昭和 56（1981）年、日本野鳥の会は苫小牧市と土地の借用協定を結び、日本初のバードサンクチュアリに指定、翌年には国指定鳥獣保護区に定められ、平成 3（1991）年には国内 4 番目のラムサール条約の登録湿地となりました。